

我が國補陀落信仰の性格

成田 俊治

(一)

日本に於ける觀音信仰が、仏教伝來以來上下各階層の人々に亘つて信仰され、平安、鎌倉時代を通じて人々の心の中に浸透し又普遍化して行つた事は、各種資料によつて明らかである。社会に浸透し普遍化した觀音信仰の具體的な現はれば、三十三所願弘、或は觀音講、そして又補陀落信仰と云う形に見られ得る。

觀音信仰のこうした諸形態の中、特に補陀落信仰について、その起源、歴史に就く必要があるが、これは特に我國に於けるその性格、信仰形態等を簡單に考察してみたいと思つ、前を逾める順序として、一体補陀落とは何かと云う事に先づ目を向けなければならぬ。補陀落とは周知の如く、觀音の淨土の名であり、華嚴經、不空羼索呪經等にある如く觀音の宮殿を示し、又その所在地として知られている。勿論この補陀落山は実在するものではなく、觀音を祭つた有名な場所の假有名詞であり、唯聖典の補陀落山が現世に存在すると信じ、聖典に擬して作られ、それが実在すると信じられて来たのである。即ち印度に於ては印度南端のマラヤ山附近、支那に於ては明州の東海六百里定海縣舟山群島の中、日本に於ては紀州那智山とそれぞ小補陀落山に擬せられている。こうした補陀落に対する觀念が、日本に於てどの様に

表はさして来たかと言ふ信仰の展開過程を見ようとするのが私の意圖した所である。

(二)

禪宗落信仰が觀音信仰の一部を形造るものである以上、觀音信仰が盛んになるに従つて禪宗落信仰も盛大となる事は當然の事であらう。しかしながら、奈良、平安、鎌倉を通じてその發展に於て、やはり時代の制約、換言するならば時代の持つ性質に影響されてゐる事を見逃してはならぬ。この意味に於て、我が國禪宗落信仰は三つの發展段階に於てこらえられ、又それ自体の性格が考へられる。結論的に云うならば、一、禪宗落信仰を説く華嚴全書の輸入以後、禪宗落信仰を一種の他界淨土として、死者の往き住むべき菩薩世界として意識せられていた段階、二、邦智山を禪宗落信仰に擬し、觀音菩薩の所住地とし現世的宗教靈地として考へられ信仰されて来た段階、三、こゝとした邦智山を禪宗落信仰と考へると共に、それより更に進んで中國の禪宗落信仰に參照しようとする意欲、禪宗落信仰と云はれる信仰形態の発生、この三段階に禪宗落信仰の發展段階があると思われ、ではその如何について考察を進めよう。

(一)、雄略古事便覧の東院仙王並寶殿之條に、可禪宗落信仰土安一鋪山とあり、奈良時代にこうして禪宗落信仰土安の圖かれたもののあつた事を記録してをり、又、扶桑略記抄二には、天平宝字五年孝明皇后の爲に興福寺内に東院を造營して觀世音像を安置し、その西辺に禪宗落信仰土安鋪帳を掲け、又東辺に阿彌陀淨土表鋪帳を掲げた事を記録してゐる事等により、奈良時代の禪宗落信仰と云ふものが、平安末頃よりの持異な形態を示したのとは異り、禪宗落信仰を現世的な宗教的靈地と考へるよりも、むしろ聖德太子に於ける天壽宮の如く一つの他界淨土として、菩

薩摩士として補陀落山を意識していたと考えられる。

(二) 所がこうした奈良時代に於ける補陀落山に対する意識は、平家中期、末期にかけて非常な勢で上下一概の人々の間に浸透した観音信仰の影響にすぎ、補陀落山の實在に云う事が真面目に考えられるに至つたのである。即ち、慈心集三に

「身燈はやすくしつべし、されど此生を改めて極楽へまうでんせんもなく、又阿夫な川は若をほりに至ていかか猶疑う心も有、補陀落山こそ此世向の内にて此身ながらも始でぬべき所な川、しからば分川へ詣でんと思なり」

と述べている事は、平家仏教の姿を略め、離脱した社会に生じた人々の、阿夫を意識し眞に救を求めようとした現は川であり、こゝに観音の淨土としての補陀落山が現実の靈地として存在を意識せられるに至つたのである。ではその補陀落山は一体どこかと云う疑問が生じて来る。之は既に紹介した如く那智山が日本に於ける補陀落山として考えられたのである、何故那智山がこの林に考えられたのであろうか。この問題を解くものとして二、三の理由が挙げられる、即ち、当時起伊熊野が山岳信仰の中心で名山靈地として信仰され、玉葉にもある如く多くの人々の信仰の対象となつていた事實。又本地垂迹思想の面から、熊野の本地は伊勢大神宮御身であるとしてゐる事より、熊野が古くから観音菩薩と關係が深かつた事實、更に平家末期頃既に成立してゐた観音靈驗所中一番南に位置してゐたと云う事實、斯くの如き思想的、地理的條件が熊野自体の性質と共に日本に於ける補陀落山として理解されるに至つたと考へられる、平家物語卷十熊野参詣の條に

「那智の御山に参給ふ、三重に漲り落る滝の水、数丈まで打上り、観音の靈像は岩の上に

叔が國補陀耆信仰の性格（成田）

願ひて補陀耆山とも謂つべし」

と云ひ、又源平盛衰記にも

「邦智御山はあなたふと、飛龍境現あはします。本拠は千手觀音の化現也——（中略）——

法華競誦の音聲は霞の底に幽也。如來の説法し給し、靈山淨土に相以たり、觀音薩埵の聖

像は岩の上にを座し給ふ、大悲の生を利益する補陀耆山とも謂つべし」

と述べている事は、邦智山を觀音の靈山淨土と見、補陀耆山と考えている一例として挙げられるものである。

三、こうした補陀耆山の實在を信じ、邦智山を補陀耆山として信仰する事は、次々にそれ以上の願望を持つに至つた、それは、源平盛衰記に

「邦智へ参給けり、佐野の渡を遙々とさし給ふ。漫々たる南海を見渡せば補陀耆山も廻嶽る」と云つてゐる事や、又三國伝記に熊野は補陀耆山の東門也と述べてゐる事により、それは明らかに未知の補陀耆山、即ち中国の補陀耆山に対する憧憬の氣持を示してゐるものである事が察せられる、こうした感情が補陀耆渡海と云う形態を現はすに至つたのである、即ち、念心衆三に、補陀耆山に参る為朝夕舟に乗り、かじの使い方を習ひ北風の吹くのを待つて專子と別れて一人舟の海に出て行つた者の記事や、又台記嘉治元年八月十八日の条にある如く、補陀耆渡海の為に三年間断食し、北風を祈りそして出て行つた事。又觀音講式の奥書、念心衆三に挙げている如く、寶龜上人が長保三年八月十八日に弟子一人と共に南海の補陀耆へ去つて行つた事に更に吾等鏡亦二十九にも、智定房と云はれる僧が入口を釘付けにし扉をなくし、暗い船の中で淡い光をたよりに三十日分の食糧を持つて補陀耆目指して出発した事、等々の資料は未知で

ある中國の補陀落山に参詣しようとする人々の事例であり、之等々々の相は、捨身往生的な色彩もないでもないが、しかしそれよりむしろ補陀落山に対する強い憧憬と宗教的な硬い意志とけいけん態度を示しているものと思う。こうした補陀落海の形態は「補陀落渡」と云う儀式にもなつたのである、之等は堀一郎博士の「民間信仰史の研究」の中で述べられているが、熊野巡覽記によると、那智にある補陀落寺の住僧が臨終に近づくとき、その僧を船にのせて流す云う儀式がある事を伝え、又その住僧の中金老坊と云い、住持を同様の儀式によつて海に流そうとした所、この僧は余りに生に對する執着が強く、止むなく強制的に海中に投入した。しかしこれより以前存命中にこの儀式を行う事を望し、住持の死後その遺骸を水葬に附する事となつたと伝えられている、之等は補陀落渡なる信仰形態を儀式化したものであり、一種の往生形式を示しているものであらう。こうした補陀落渡海と云う形式が足利時代にもあつた事は、續史愚抄卷四十、文明七年十一月二十二日の條に熊野補より補陀落山に渡つたと云う記事より窺い知られる。

(三)

以上簡單に我國補陀落信仰についてその通程及び形態を發展的に三段階に分けて考察したわけであるが、こゝで要約してみると、平安初期迄の補陀落信仰が画、絹帳紙上に補陀落淨土變に現はれ、死者の行くべき菩薩世界、他界淨土として意識せられ、それが平安中期より末期鎌倉にかけて、更に浄土として那智山が擬せられ多くの参拝者を出し、更に以上挙げた資料の如く補陀落渡海と云う形態で盛んになつて来たのであり、そこには観音信仰との関連に於て、

空想的なものから現実的なものへの過程をへるに至つたのであり、観音靈驗所巡礼と云う巡礼行とその根柢に於ては一連の關係を有するものであると考へられる。そしてその渡海と云う信仰形態の形成も、堀一郎氏が述べられている如き、一種の往生形式と云うよりむしろ、種々な資料によつて明らかなる如く、めんみつな準備、強い意志のもとに補陀落山に参詣し利益を得、再び元へ歸つて来ると云う考えが窺われる。それは中國の補陀落山が古くから日支交通の途としてあり、この島に止つて觀音を礼拝し航海の安全を祈る等を常とした事實から推して、日支交通が盛んになるに伴つて中國の補陀落山が一般に知られた所に、補陀落渡海は中國補陀落山の参拝を目的としたと考えられるのである、そこには未知である觀音淨土としての補陀落山に対する憧憬と現世利益的救済の願求が見出されるのである。

以上斯くの如き三段階に於て我國補陀落信仰が存在し、又性格が見出れると思つのである。

（研究室・助手）